



report 01

## 信州における千曲川・犀川とサケについて

山国信州がサケの捕獲大国であった!?・・・。

山国信州の千曲川・犀川から獲れるサケは、古来から非常に大切に重要な産物であった。また、信州の千曲川・犀川は古来からのサケの特産地でもあった。その特産地の中でも現・長野市の千曲川・犀川合流一体と松本平の犀川明科地籍一体の捕獲量は特に目立っている。

これらを物語るように、古く戦国時代に信州を征服した武田信玄は、サケの獲れる川を鮭川と呼び、千曲川も鮭川と呼ばれていた。そして鮭川から獲れたサケ10本に対し4本の割合で貢納を命じている。このような貢納は江戸時代にも続けられ、松代藩は川合村・大豆嶋村(現長野市)で獲れたサケ4割を年貢として納めさせていた。

千曲川下流に当たる壁田城山の切通しの南、長丘丘陵に沿って点在する厚貝村(現中野市)の百姓らから、弘化3年中野御役所にサケの運上に関する願書が提出されているが、この文書の語るところによれば、サケ運上金の額が永500文・小魚類運上金が永133文3分であることからして、ここでサケの漁獲ができた者は運上金を納め、特別に許されたのは百姓たちであった。当時は千曲川下流域のこの付近では相当多くのサケが獲れたことがわかる。

江戸時代には現・長野市の千曲川・犀川合流地付近の千曲川・犀川の本流は無論、支流の保科川・鮎川には松代藩が河川を全面締め切りと言う大変大掛かりな漁法で遡上してきたサケの大量捕獲を行った時期がある。しかし、千曲川上流の上田藩・小諸藩・犀川上流の松本藩から抗議があり、その後全面締め切りから半締め切りに新ためられたとの説がある。どの藩も千曲川、犀川のサケはいかに大切な特産物であったかがわかる。

また、犀川中流(松本平)の支流河川である農具川、高瀬川、穂高川、万水川・会田川・潮沢川、麻績川、奈良井川とその支流河川、さらに犀川本流にはいづれの方法にしても多くの河川締め切りによる漁が行われ、多量のサケが捕獲されて、藩の財政上大変に重要なことであった。このことから各々の村ごとにサケのうばい合い合戦が各所で展開され、人命にまでかかわったことも多かった。その上、百姓にかかってくるサケの年貢問題で藩を巻き込んだ問題も多く発生、代官とのトラブルなどが多く発生している。

ちなみに江戸時代には松代藩と松本藩は毎年のように將軍のもとへサケを献上している。

明治時代になってもサケの漁獲量は減少せず重要な産業であった。

明治28年には千曲川・犀川水系で1,103貫、明治45年で2,329貫、大正3年では2,073貫、昭和5年で12,844貫、昭和6年は17,989貫のサケの捕獲量があり、西大滝ダム完成の翌年昭和15年は576貫となっている。

明治12年には長野県が綿内村(現長野)の湧水を利用してサケの孵化場を設置、人工孵化と稚魚の放流を行っている。

ちなみにサケは、千曲川では最上流の現・川上村まで、犀川では梓川方面では安曇村(現・松本市)の上高地近くまで、奈良井川では塩尻市、薄川では入山辺村(現・松本市)まで、さらに農具川では木崎湖まで遡上している記録がある。

昭和14年千曲川下流に西大滝発電所(東京電力)のダムが完成されたことにより、サケの遡上は全く見られなくなってしまった。ただ、ダム完成翌年昭和15年には、ダムまで遡上して来たサケを東京電力職員が捕獲してダム上流へ放流した。このことにより少量の捕獲があった。しかし、昭和16年からは全くサケの遡上は無くなってしまった。ちなみに昭和15年最後の捕獲記録としては、千曲川支流、犀川支流、奈良井川支流、田川支流、薄川の松本市筑摩橋付近で1尾捕獲(長田保)されている。

昭和25年には長野県が中心となり、「千曲川にサケよ再び」というテーマで「カンバックサーモン事業」が実施され、2000年までの51年間にわたり展開された。栄村から長野市までの小・中学校17校では、北海道産サケの卵を孵化させて飼育し、千曲川へ放流していた。しかしその回帰率は非常に悪く、平成2年の21尾の回帰を最後に年々減少し、ついにこの事業も平成12年の春に幕を閉じた。なお平成14年の秋には西大滝ダムまで遡上したサケが3尾確認されている。

この回帰率の悪いことは、遡上期のダムの放水量の問題、放流魚の降下時の発電ダムタービンでの死亡など多くの問題が指摘されている。

長野県水辺環境保全研究会  
事務局長 長田 健

## ～川は誰のもの？～信濃川カヌー川下りツアー

地震でよみがえった信濃川。

2004年10月23日の中越大震災で当地十日町地域も大きな被害を受けました。しかし、不幸中の幸い。信濃川が満面に水をはり、滔々と流れていたのです。夢にまで見た本来の大河信濃川が一瞬の天災でよみがえり、その雄姿を我々に見せてくれました。地震でJRの発電所が壊れ、発電が停止したため宮中ダムから全放流していたのです。

千載一遇の大チャンス!!

今年の春になって一部取水が再開されましたが、それでも100m<sup>3</sup>/秒くらいの水は流れていました。この千載一遇のチャンスに下らなければカヌー乗りとして絶対後悔する。ということで、信濃川の川下りを企画しました。

十日町市妻有大橋をスタートし1日目のゴールを長岡の妙見堰、河原で1泊して2日目で大河津分水まで下る63kmのツアーを企画。参加者は一般公募14名、青年会議所(JC)メンバー11名、ガイド3名の総勢28名。他に陸上サポート10名。



川口橋付近での様子

水量150m<sup>3</sup>/秒。快晴。水清し。

当日は朝から快晴。水清し。水量は約150m<sup>3</sup>/秒で通常の20倍。初心者には「沈」多発が予想されるため午前のみラフトボート下ることになり、ラフトボート1艇、ダッキー(2人乗りゴムカヌー)6艇、カヤック7艇でスタート。

信濃川中流部は瀬場あり、瀬あり、急流ありで、川下りの様々な楽しみが凝縮された絶好のカヌーゲレンデ。瀬場では、川に飛び込み、水をかけあい、景色を楽しみ、のんびり川下りを満喫。一変して、川の水が一箇所に集中する急流部では、スリル満点のビッグウェーブを楽しめます。遊園地の絶叫アトラクションなど比ではありません。カヌーは命がけで遊べるから最高です。

川口町卯の木の河原でお昼。ここから全員カヤックに乗りかえ、26艇でゴールを目指し再出発。午後からは魚野川と合流し水量も増え、川幅も広がり、ますます大河の様相がはっきりとしてきます。広い川面に26艇のカヌーが点々と散らばり、川に抱かれながら、思い思いに漕ぎ進みます。

JR東日本小千谷発電所前は震災のおかげで放流はなく安全に通過。小千谷の旭橋、小千谷大橋をくぐり妙見堰へ。あの痛ましい崩落現場を対岸に見ながら、全員無事にゴール。約30kmを約8時間かけて下りました。夕日を浴びながら心地よい疲労感と、達成感に酔いしれました。

初日のみ参加の一般参加者を見送り、JCメンバーと一般参加者2名、ガイドの星野さんは妙見の河川公園でキャンプ。カヌー談議、川談議で酒宴は盛り上がり、夜は更け、午前さま。

ただひたすらに信濃川。

2日日も快晴。妙見堰下流500m地点をスタート。間もなく越路橋の真下急流部の隠れテトラに引っかかり3艇が沈。ここはガイドも真っ青、要チェックの危険箇所。あとはひたすらトロトロの流れを漕ぎ進み、長岡の蔵王橋でお昼。このあたりから川面を渡る風が少々臭くなり、水もよどんできました。

弥彦山が見えはじめるあたりでは川幅が数百メートルに広がり、分水に近づくと川幅1kmほどに。ほとんど流れも感じなくなり、それぞれ漕ぐスピードの差もでてきます。美空ひばりの「川の流れのように」を口ずさみながら分水に入り、洗堰上流50mで上陸。63kmの川旅を終えました。

胸高なる明日の大河へ。

毎秒7m<sup>3</sup>のチョロチョロ水では到底体験できない十日町からの快適な川下りを天からプレゼントされました。私が10年くらい前に妻有大橋から下ったときは、10km下の栄橋まで半分くらいカヌーを引きずって歩いたことを思い出します。ところが150m<sup>3</sup>/秒流れていた今回は、「沈」が続出するほどの楽しい川に変わっていたのです。「一生の思い出になった」「夢のような一日だった」と語ってくれた参加者も多く、豊かな水がもたらす可能性に胸が高なります。

(社)十日町青年会議所  
信濃川委員長 山田 努



## report 水辺の散乱ゴミ、その指標化の意義

川や海の水辺に、いつの間にか目立つようになった散乱ゴミ。とくに海岸に漂着するゴミは、日本海沿岸域や離島で顕著に増大しています。これらは海洋ゴミのごく一部であって、海中に漂っているもの、海底に沈んでいるもの、その総量は推定しがたい状況です。

JEAN / クリーンアップ全国事務局（東京都国分寺市）によれば、全国の海岸や川等でのモニタリング結果から、海岸に漂着するゴミの6～8割が、川を通して流出してきた内陸の生活系のゴミと推定されています。多種多様な品目ですが、その材質はプラスチックのものがほとんどで、日本海を含めた太平洋海域の海洋環境に、長期にわたる深刻な影響を与える懸念が高まっているのです。

酒田市は、県内を貫流する最上川の河口かつ日本海沿岸域でもあるため、上流域から流出してきたゴミや、他国や他県から越境して漂着するゴミで、河口部や海岸部に多量なゴミが集まります。当NPO法人が事務局を担い実施してきた事業の一つに、「最上川河口クリーンアップ作戦」があります。拾うだけではなく、解決に向けた一歩先の取組みを考えていたとき、当時着任された国土交通省山形河川国道事務所長の安田吾郎氏からの提案を受け、河川等におけるゴミの指標評価の検討を始めたのが、2002年のことでした。

水辺の散乱ゴミを指標化する困難さは、多種多様な形態の物の総体であることに起因しています。従来、水質基準等で対象とされてきた物質は「水に溶ける」ものであり、分析が可能です。しかし、「水に溶けない」ものである水辺の散乱ゴミの測定は、どのような単位を想定しうるのか。全国での展開を想定し、県外の研究者やNPO/NGOの関係者を含めた検討会を設置、フィールド実験を重ねた結果、単位面積あたりの「かさ容量」を基に「ランク0」から「ランク8」までの9段階で評価する手法を開発(提案)したのです。

この指標化によって、①各河川におけるゴミの現状と推移を把握、②河川や海岸における清掃活動等の活動評価に応用、③ゴミの減量に向けた地域への情報発信に活用できるなど、の期待がもてます。

ランクの判定方法は、100平方メートルあたりの水辺に、家庭用ゴミ袋（かさ容量20リットル相当）一袋分の散乱ゴミがあった状態を「ランク3」とし、その半分量の場合を「ランク2」、倍量を「ランク4」としました。実際それに相当するゴミ（クリーンアップ作戦で回収したもの）を、最上川上流の河川敷に散乱させ、一定条件の下で写真撮影し、基準の写真として判定に活用することにしました。

2004年秋、県内の市民団体等の協力も得て、山形県内の水辺の状況を試行調査し、その結果をまとめ、国土交通省の山形及び酒田河川国道事務所、新庄河川事務所、山形県と協働して「最上川2005ゴミマップ」を制作、今年の4月末に発行したのです。

今年2月、国土交通省河川局海岸室とJEAN主催の「第2回きれいな海辺アクトフォーラム」では、海洋（海岸）ゴミ問題への対応には、実態を把握するためのモニタリングが重要であると、討議されました。この手法も、対策のためのモニタリングの中で、どのような部分を担うことができるのか、今後検討を重ねていくこととなります。河川や海岸等の水辺の散乱ゴミの総量を、低コストかつ簡易に把握していくには適した手法ではないかと、期待しているところです。

特定非営利活動法人

パートナーシップオフィス理事

金子 博

## report 04 川と田舎暮らし

田舎暮らしを始めて早9年、溪流釣りやキャンプそして酒、このパターンが何よりの癒しであった東京の暮らしが高じていつしか田舎暮らしが夢となり、ここ魚沼市干溝での生活は、東京で考えていた以上に充実した日々を過ごしている。

ある晩、隣の親父と酒を酌み交わしながら、村の真ん中を流れている大池川（干溝集落の人は何故か大川と呼ぶ）の話になり、子どもの頃川で遊んだ思い出話を聞いたことが強く印象に残り川環境への係わりの出発点となった。それは3面護岸された（写真の風景）今流の川が、当時（40年以上前）我家の前は河畔林、淵も瀬もあり、わずか6～7mぐらいの川幅で対岸の家が見えないくらい林に覆われていた、そこで岩魚や山女を潜ってはつかみ取り、淵をせき止めてドウハンノキ（沢ぐるみ）の葉を搾って川に流し魚を取って食べた話、又あるときは漬物樽に鮭が飛び込んでいた（漬物を漬ける時期になると空の木樽を締めるために川に置く習慣）話、沢かにを潰してやけどの薬にしたなど話が尽きないのであったが、私には今の川の姿からは到底想像すら出来なかった。親父いわく、今になってみるとその時代がほんとに良かったし、その当時の川に戻したいよね。この話がきっかけになって、昔の川の思い出を書いてもらおうよということになり、その当時を知る集落の世代の人々に呼びかけたところ80歳以上のお年寄りを含め30人近くが寄稿してくださり1冊の文集にまでなった。川への思い入れの強さと関わりを改めて感じ入った。大川という言い方もなんとなくわかるような気がする。

話は変わるが、私は今、自分の楽しみであるアウトドアライフを子ども達に野外教育という名目で自然体験活動が日課に加わり（ほんとは自分だけで楽しみたいのだけれど）、その一環で夏には粟島に子ども達と3泊4日のキャンプをしている。いつの頃からか漁師と友達になり、自分のアウトドアライフを満足させるためにキャンプ以外の時に、年に数回訪れ漁

師宅に泊まりながら、漁船に乗り漁を手伝っている（間違いなく足手まといになっていると思うが）。ある時、底引きの網を上げると自転車がかかっており、聞いてみると大雨の後等、特に河口付近では多くごみが掛かり漁にならないことすらあるとの事（時には数百万円もする網を切ることもあるとか）。最近では海への不法投棄が厳しく取締られ、漁への影響はすくなくなっただけだが川からの贈り物は減っていないようだ。



すっかり姿が変わった大池川

私たちが暮らす社会で川がいかに大きな影響力と存在感があるか改めて感じた。そして我が魚沼市に流れる魚野川は信濃川水系の約35%近くの流量を供給しているとの事、良くも悪しくも信濃川への影響力は大きい。川は生活の場、遊びの場であり、環境指標と維持の働きでもあった川が治水利水という名目で大きく変えられてしまった。たぶん例外ではない日本一の長さを誇る信濃川、長さだけではなくほかにまだ日本一が出来るはず、「点から線そして面へ」を目指して交流が拡大出来ればと考える昨今である。最後にこのような活動に係われることが田舎暮らしの一層の充実につながっているようです。感謝します。

奥只見郷ネイチャーレククラブ  
坂本 恭一

report 05  
往復書簡「信濃川生き物交流宣言」下流新潟から上流長野の「川守」へ

当会は10月に、市民の目で水辺を歩き、楽しみ、汗をかきで19年目に入りました。

1987年10月に開催した九州柳川市でのドキュメント「柳川堀割物語」の上映会&シンポジウムが当会の起点。「堀は、俺たちの生きてきた“存在証明の場所”だ。埋めるなんて許せない」という堀を守る想いが噴き出してくる大作の160分間でした。堀は、治水や利水などの機能だけでなく、遊びの場であり、生き物や祭や江ざらいの場。暮らしの一部になっていた堀のないまち、堀のない人生なんて考えられないと広松伝さんは訴えていたようでした。

水辺の会は今、個人の想いの「水辺の再生」を200余名の想いにするNPO法人に育ちました。が、流域全体の想いをつなぐまでには達していません。身近なドブ川通船川や佐潟に始まり、阿賀野川、中ノ口川、魚野川、上流の千曲川と時々の交流や支援、イベントを仕掛けてきました。私達の日常活動の限界を自分事として楽しみながら。

## ■川は、もう待てないのでは？

治水や利水が地域に大事なことは誰もが否定しません。でもそれだけでは川は死んでしまうと考え、環境を加え「新河川法」が1997年に出来たはず。その後の整備に生き物に配慮した整備は確かに進んでいます。

ではどれだけ生き物が、水環境が戻ってきたのでしょうか。水量はまだ復元できないため渇水期には水温が上がり、農業などで使いまわす水利用などで水質は低下し、泳ぐ環境に程遠といます。生き物も過酷な環境に強いもの、外来種などが入り込み本来そこに自生していた生き物たちのすめる川ではなくなっています。

では本来の川って何だろう。生物生態学的な川だろうか。川漁はスポーツフィッシングに

なっている。川遊びはオフロードの車に変わっている。堤防も高く川を知り尽くし何か遭ったら助けてくれる若者もない。川辺の楽しい舟漕ぎもできない。川に関心のあるのは、水利や漁に権利のある人、写真家、スポーツレク活動者だけだろうか。川と付き合う、川を楽しむ時間や技を伝える指導者も少ない。映画『猿の惑星』のように人のいない川なら生き物は戻ってくるのでしょうか、それでは「川ガキ」の遊ぶ姿のある川は戻って来ません。

## ■もう稚魚の放流はしないのですか？

本来の川の再生には、戦略が必要です。下流の再生戦略は、水上バスから遊覧船、水上タクシーなど誰もが乗れる船、マイカー並みの100、200隻の川舟の走る川です。上流の再生戦略は、群れをなす魚や誰もが楽しめるカヌーやラフティングでしょうか。

本来の川としての信濃川の再生には、上・中・下流で同時に連携して取り組む戦略が不可欠です。それも持続できる息長い取り組みが必要です。そう考えると、流域全体として取り組める再生戦略で可能なものは、単純なことで難しいことですが、「サケやマスの上り、下る川」ではないでしょうか。

でも3年ぐらいの節目の目標を立てて持続できる運動にしたいものです。英国のナショナルトラストは3人の市民運動から始まって今では年間500億円の予算、8千人のスタッフ、4万人のワーキングホリデー支援があるといえます。そんな流域づくりへの1歩を「鮭年」として始めたいものです。上流長野では、もう稚魚の放流はしないのでしょうか。

新潟水辺の会  
世話人 相楽 治

## report

# 縄文文化は日本の自然の豊かさの証明

### —一定住を可能にした自然環境の意味—

最近、「国土学」という新しいキーワードが注目されている。それは、国土の近代化が進めば進むほど生物多様性が失われ、災害が深化するとともに、我々にとって必要な資源や情報の大半が外国から輸入され、今までの領土的感覚で国土をとらえることはできず、世界との繋がりの中で国土を位置づけ、今後の人口減少の中でそれをどのように形成していったらいいのか問われているからである。

私は、新潟大学建設学科で自然と人間の関係を史的に明らかにし、自然と人間の持続的共生を可能にする社会基盤システムのあり方を研究教育している。そこで、この連載にあたって、まず国土の自然をどのように認識したら良いのか、そこから考察を始めたい。

日本の自然を考える時、その原形はいつまで遡ればいいのか? 議論が様々あろうが、氷河時代が終わり、海面上昇で日本列島が大陸と切り離され、今日とほぼ同じ自然環境になった約一万年前からを対象にすれば十分でないかと考える。すなわち、縄文文化が始まった頃からである。

その縄文時代について、私は「人々は労力の大部分を食料の獲得にさかなければならず、生活の程度も低く、ものの考え方も幼稚であった。」「(詳説日本史)」と習った。農耕がなかった日本の縄文文化は遅れた社会だったと教えられたのである。しかし、近年の縄文研究では、縄文文化がそんなに遅れたものではなく、むしろ農耕社会を必要としないで定住文化を確立した社会として高く評価されるようになってきている。

新潟県にもさまざまな縄文遺跡があるが、まず筆頭に挙げたいのは一万二千年前の世界最古の土器が出土する阿賀野川支川常浪川沿いの小瀬ヶ沢遺跡である。土器の出土は、そこで定住が始まったことを意味する。土器は移動すると壊れやすく、採取・狩猟生活では土器を常備できないからである。その土器の世界最古といわれるものが出土しているということは、まさにそこで世界最初の定住文化が始まった事を意味し、新潟県でそれが発見されたということは再評価すべきでないかと考える。この他にも、国宝の火焰型土器を出土した信濃川沿いの笹山遺跡、低地性縄文文化を代表する

加治川村青田遺跡、付替えた川を挟んで居住地域と墓域を計画的に分けた奥三面遺跡などの縄文遺跡がある。

今まで世界の文明は、西アジアや中国で約1万年前に農耕を開始して七千~八千年前に“農耕社会”を出現させたことに端を発する、とされてきた。すなわち、農耕があつて始めて定住が可能となり、土器が生まれ、磨製石器、編物・織物、集団墓地などが出現し、文明が形成されたと言われてきた。しかし、日本の縄文文化は実は農耕社会と同じ要素をすべて兼ね備えていたのである。普通、採取・狩猟社会では一平方キロメートルあたり0・一人しか養えないといわれているが、縄文時代には一平方キロメートルあたり三人以上を養っていたとのことである。これは初期の農耕社会に匹敵する人口密度であり、農耕がなくとも、こうした高い文化を創り得たのであった。それは、四季の変化に富んだ日本の自然がそれだけ豊かに食糧を供給してくれたことを意味している。

また縄文社会では、糸魚川産ヒスイの分布に見られるように全国に及ぶ物流があり、その物流にのって、トチや栗、サケ・マス、鹿・熊など、豊かな食糧も交易されていたと想像される。

すなわち、縄文文化は、農耕がなくとも定住が可能であり、日本の自然環境が世界の中でも跳び抜けて豊かであったことを証明しているのである。

この豊かな自然環境は、基本的には戦後の高度経済成長時代までは継承されていたとって過言でない。しかし今の日本は、五〇年あまりでその自然の豊かさを失うとともに、その自然をうまく利用する“わざ”も失ってしまった。わが国土を美しく持続するためには、縄文文化を生み出した世界に誇る豊かな自然とそれを自在に利用する“わざ”を復活して、今の技術と組み合わせることが肝要でないかと考えている。

新潟大学工学部  
教授 大熊 孝  
(新潟水辺の会 代表)

新潟日報 2005年6月25日より

発行：特定非営利活動法人 新潟水辺の会

事務局：〒950-2265 新潟市みずき野4-7-15 大熊 孝 方

Phone 025-265-3191 Fax 025-265-3250

e-mai: info@niigata-mizubenokai.or.jp

ホームページ: <http://www.niigata-mizubenokai.or.jp>

会の紹介リーフレットができました。ご希望の方は事務局までご連絡ください。